

## 第4節 指定に至る調査の成果

### 1. 取り巻く自然環境

#### 1-1. 位置・地勢

大洗町は茨城県の東部に位置し、茨城県の県庁所在地水戸市から南東に約11km、首都東京から北東に約100kmの距離にある。東西2.5km、南北9.0kmで面積は23.89km<sup>2</sup>である。漁港・港湾の整備、海側の埋め立てをすすめ、昭和54年の面積よりも1.38km<sup>2</sup>増えている。東部を太平洋に面し、北を那珂川、北西を湊沼川が流れている。海岸線は弓なりの湾形をなし袖ヶ浦と呼ばれる。美しい海岸線はかつて播州の舞子浜になぞらえて常陸舞子と呼んだこともある。市街地は概ね海岸線に沿う低地部に形成され、後方に標高25m～35mの台地を背負っている。湊沼川に近い低地部は水稻が栽培され、台地は畑や山林となっている。この台地は関東ローム層の洪積台地である鹿島台地の北部に位置している。

磯浜古墳群是那珂川と湊沼水系、外洋に挟まれた独立した約25～27mの高台に立地しており、明治時代末に磯浜築港が整備されるまでは、古墳群の南方約400mに汀線<sup>ていせん</sup>を望む臨外海性<sup>りんがいかいせい</sup>の立地であった。



図2-5 磯浜古墳群の位置

#### 1-2. 気候

大洗町は海洋性の太平洋側気候のため、比較的温かな気候である。夏は高温多雨で、冬は強い季節風が卓越し乾燥した日が続く。また、梅雨と台風の時期に降水量が多いことが特色である。平均気温は茨城県の内陸地方と比較すると冬は平均で1～3度高く、夏は逆に2度前後低くなるため、温和でしのぎやすい気候となっている。

1-3. 地形・地質

大洗町は、関東平野北東の鹿島灘を望む海岸地帯に位置し、磯浜町から成田町にかけて台地が広がっている。町の北側には那珂川が流れ、大洗町・ひたちなか市で太平洋に注ぐ。西側には涸沼川が流れ、台地の西側に形成された谷津やため池を通して雨水等を集めながら、河口付近で那珂川に合流する。

鹿島台地の北部の磯浜古墳群付近の地質は、見和層や関東ローム層が堆積した洪積台地が海成及び河成段丘となったものである。その下層には、主に礫岩から構成される大洗層が厚さ1,000mに渡って分布しており、6,000～5,500万年前に堆積したものと考えられている（『茨城県北ジオブック』）。この大洗層は海岸北部において露出しており、大洗層由来の礫岩は磯浜古墳群の葺石とも違和感はなく利用された可能性が高い。

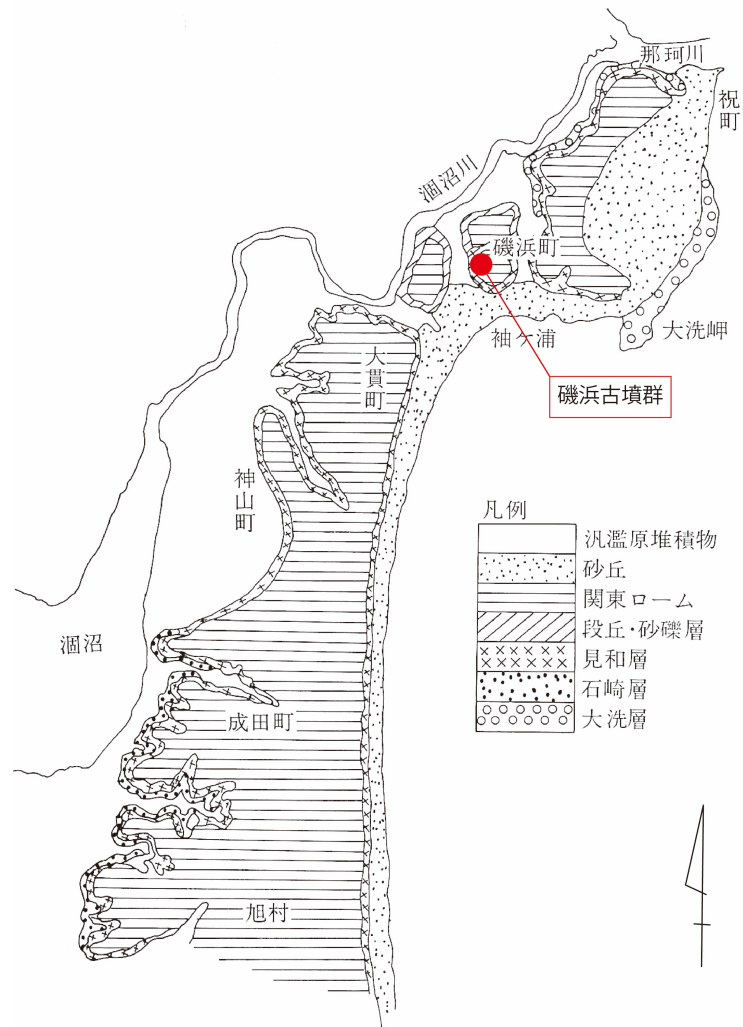


図 2-4 大洗町の地質

(出典：『大洗町史 (通史編)』に加筆)

1-4. 植生

大洗町は、常緑広葉樹林帯に属し、暖帯林の極相を形成する樹種はスダジイである。また、海岸部に位置する大洗磯前神社の境内林は、関東地方の太平洋岸沿いの台地斜面などに見られる暖帯性樹叢の一つと位置づけられる。

その美しさから日本の渚百選、日本の白砂青松百選に選定された「大洗海岸」の砂浜後背地には、クロマツやケカモノハシ、コウボウムギ、ハマヒルガオ、ハマゴウなどの海浜性の植物群落が広く点在して生育し、また絶滅危惧種であるシロヨモギやハマナスの小規模な



大洗磯前神社の樹叢

クロマツ林

ハマゴウ

写真 2-1 大洗町域でみられる植生

群落がみられる。しかしながら、重点対策外来種であるコマツヨイグサやその他の総合対策外来種であるオオフタバムグラ、アメリカネナシカズラなどが侵入しているため、在来の海浜植物の生育地を圧迫する恐れがある。

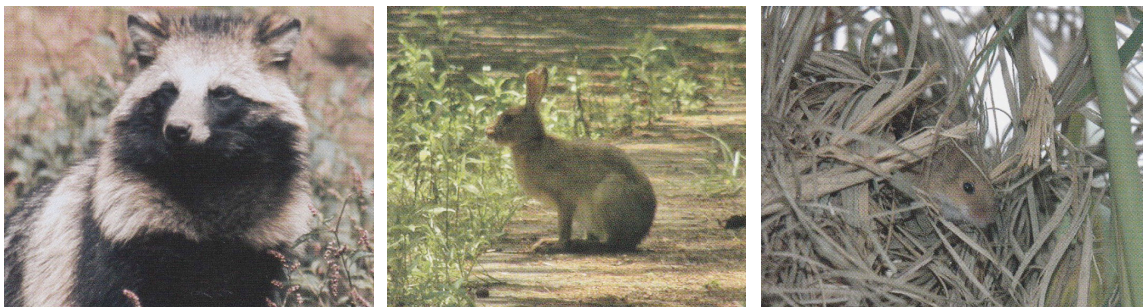
磯浜古墳群の植生は自然植生に近いものと考えられており、モウソウチク、スダジイ、シロダモ、ソメイヨシノ、ツタウルシ、モチノキ、コブシ、モミジ、ヤブツバキ、アオキ、ニワトコが挙げられる。

#### 1-5. 動物

##### (1) 哺乳類

『茨城県版レッドデータブック<動物編>2016年改訂版』によると、茨城県の哺乳類の特徴として、近世・近代以降ツキノワグマやニホンカモシカ、ニホンジカ、ニホンザルといった大型の動物が分布しなかった中で、ニホンイノシシは分布、個体数ともに増加の傾向が見られる。中型の動物としては、タヌキとキツネが低山地及び平野部から丘陵地帯にかけて生息している。これらは宅地開発や道路建設などにより、生息地が失われたり分断されたりしている一方で、人為的な餌資源や廃屋などを利用することもある。外来種のコウビシとアライグマは県内でも分布を拡大し、個体数も増加しつつある。

潤沼周辺においては、ホンダタヌキ、キュウシュウノウサギ、ホンシュウカヤネズミが見られる。



ホンダタヌキ

キュウシュウノウサギ

ホンシュウカヤネズミ

写真 2-2 大洗町内でみられる動物（出典：『汽水湖 潤沼』）

(2) 鳥類

海浜部では、チドリの仲間であるイカルチドリ（絶滅危惧Ⅱ類）、ムナグロ、シギの仲間であるキアシシギ、カモメの仲間であるユリカモメとセグロカモメが飛来する。カモメは町



イカルチドリ

コアジサシ

チュウヒ

写真 2-3 大洗町内でみられる鳥類

(出典：『茨城における絶滅のおそれのある野生生物動物編 2016年改訂版』)

の鳥にも指定されている。絶滅危惧Ⅱ類であるコアジサシも海岸線に営巣しているのが確認されている。

潤沼は多くの水鳥の生息地であり、平成27年にラムサール条約湿地に登録されている。約220種類の野鳥が確認され、75%が渡り鳥である。潤沼川右岸の神山町にある広大な砂並のヨシ原は、野鳥の重要な生息地となっており、チュウヒ（絶滅危惧種ⅠB）、オオタカ（準絶滅危惧種）、ミサゴ、チョウゲンボウなどの猛禽類、オオヨシキリ、セッカなどヨシ原で営巣する種が確認されているほか、オオセッカ（絶滅危惧ⅠB類）やオオワシ（絶滅危惧ⅠB類）など茨城県内で見られる希少種59種のうち、38種類が確認されている。

山林・農地では、オオタカなど猛禽類が確認されており、水田や農業用ため池は野鳥や水鳥の餌場や休息地となっている。

(3) 爬虫類

ウミガメ類では、アカウミガメが産卵のため鹿島灘から日立市にかけての砂浜海岸を訪れる。平成23年3月に発生した東日本大震災で海岸も津波に襲われ、海岸の環境が大きく変化した場所もあるが、幸い県内の砂浜海岸は現在も産卵場として使われている。

トカゲ亜目では、ニホンヤモリ、ニホントカゲ、ニホンカナヘビの3種が確認されている。トカゲとカナヘビが減少傾向にある中、ニホンヤモリは近年、県内での分布域は拡大し生息数も増えている。

ヘビ亜目では8種が確認されているが、どの種も生息数は減少傾向にある。中でも、ヒバカリ（情報不足②現状不明種）とシロマダラ（準絶滅危惧種）、タカチホヘビ（準絶滅危惧種）の3種は、生息の確認地点が少なく個体数も少ない。

## (4) 昆虫

大洗磯前神社付近や夏海バイパス沿いの松林には、準絶滅危惧種のマツムシが生息しているが、海岸砂防林でもある松の松くい虫被害が目立つ。

潤沼は、ヒヌマイトトンボ（絶滅危惧IA類）やオオルリハムシ（絶滅危惧II類）など、湿地帯特有の多くの種の生息地となっている。

農業用ため池として利用されている大貫池とその南側の湿地帯の金竜泉に

は、絶滅危惧種のネアカヨシヤンマ（絶滅危惧II類）、マダラヤンマ（準絶滅危惧種）、トラフトンボ（準絶滅危惧種）をはじめ、県内で生息地が減りつつあるカトリヤンマ、チョウトンボなどのトンボ類が生息する。



マツムシ



ネアカヨシヤンマ

写真 2-4 大洗町内でみられる昆虫

（出典：『茨城における絶滅のおそれのある野生生物動物編 2016年改訂版』）

## (5) 水生生物

町の北部に位置する大洗海岸には、県下最大規模の岩礁地帯が広がり、カニ類、ヒトデ類、アメフラシなどの軟体動物類、シロメバル、スズキ、ムラソイといった魚類など、多くの海洋生物が生息している。特に海藻類は、アラメ（カジメ）やヒジキ、アオサ類など茨城県沿岸地帯から記録がある164種のうち過去には124種が確認された。しかし沿岸部の開発を経て、近年では砂礫が岩礁を覆うなどの原因により、種類数は減少傾向となっている。

また南部に位置する砂浜は鹿島灘に面し、外洋性のチョウセンハマグリを始めとした、砂地を好む貝類の生息域となっている。

潤沼は海水が入り込む汽水湖で、スズキ、クロダイ、ボラ、ハゼ、コイ、サツパ、コノシロ、フナ、コイ、ウグイ、ニゴイ、ヌマガレイなど、海水・淡水・汽水の魚介類が豊富に生息している。また関東有数のヤマトシジミの漁場であるほか、スズキ、クロダイ、ハゼの釣り場として賑わっている。近年、特定外来生物であるオオクチバス、ブルーギルなどが確認されており、生態系への影響が懸念されている。



シロメバル



スズキ

写真 2-5 大洗町域でみられる魚類